

縄文時代と続縄文時代の生活（紀元前13,000年～紀元後600年）

北日本の先史時代の人々は、約 3 万年前の最初の移住後に、新しい生活様式を徐々に取り入れていきました。大型哺乳類を追いかけて移動する生活から、定住地を確立し、狩猟、漁労、および採集を営む生活へと移行していきました。生活様式が確立されるにつれ、文化および社会もそれに適合するように変化しました。

気候の温暖化がこの変化を促進し、これにより食料をより広く入手できるようにしました。かつてのツンドラには森林が生え、シカなどの獲物の生息地となり、クリやクルミなどの果実のなる木々を含む植生が多様化し、海面が上昇して、貝類採集や沿岸漁業のための浅い入り江が形成されました。

人々は紀元前 13,000 年頃に、豊富な食料源のある場所に徐々に定住し、土器の使用を始めました。土器の出現は縄文時代（紀元前 13,000 年～紀元前 300 年）の始まりを示し、定住コミュニティの発展と一致します。初期の土器は素朴で装飾のない実用的なもので、調理などの機能に特化していました。時が経つにつれて、デザインは次第に精緻になり、縄文（紐の跡）で模様が付けられることが多くなりました。最も装飾的な土器の一部は埋葬地や祭祀跡から発見されており、精神世界に関する信念の一部として、人々が複雑な儀式を

執り行ったことを示唆しています。

集落の規模と数が増えるにつれ、共同体は交易と文化交流を行うようになりました。人々は北海道の水路を航行経路として利用し、毛皮、装飾品、道具、黒曜石などの原材料を交易しました。続縄文時代（紀元前 300 年～紀元後 600 年）までには、交易網は日本列島の本州にまで広がっていました。そこでは農耕社会が精錬および金属加工とともに発展していました。これらの交易ルートを通じて、北海道の共同体は鉄器や金属製の道具を手に入れることができ、狩猟、採集、漁労活動をより効率的に行うことが可能になりました。